

発行所 福島県中学校教育研究会社会科研究部
 発行人 鈴木 豊
 発行 令和5年3月3日

- 令和4年度の研究成果及び
 令和5年度の研究主題・副主題の解説・・・2～4
- 県大会参加分科会担当表 …………… 4

あいさつ

福島県中学校教育研究会社会科専門部長 鈴木 豊



今年度は、新たな研究主題「持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育む社会科の指導はどうすればよいか」のもと、副主題「社会的な見方・考え方を働かせ、主体的に学ぶ力を育てる授業の工夫」について研究を進めて参りました。

10月の県中教研研究協議会会津大会は、今年度も残念ながら参集する形で協議会を行うことはできませんでしたが、オンラインという形であっても新たな研究主題に基づき、意見を交わす場を設けることができたことは、大きな意義があると思っています。これもひとえに、コロナがどのような状況であっても開催できるようにと、工夫を凝らしながら開催に結び付けてくださった会津支部の皆様の思いがあってのものと、心より感謝申し上げます。また、各支部における中教研の活動も、過去2年間と比較すると活動の幅が広がってきたように感じています。コロナ禍においても、各支部ごとに工夫しながら研究に取り組んでいただいたことに改めて御礼申し上げますとともに、今年度の研究成果と課題を次年度以降につなげてほしいと思います。

さて、前述したように、今年度から新たな研究主題に基づき研究を推進していますが、副主題にある「社会的な見方・考え方」は、部報で「社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連等令を考察したり、社会に見られる課題を把握してその解決に向けて構想したりする際の『視点や方法』である。見方・考え方は持続可能な社会を実現するための礎となる。」と示されています。先日、独立行政法人北方領土問題対策協会主催の「北方領土に関する全国スピーチコンテスト」の審査に参加する機会に恵まれました。参加した中学生10名のスピーチは、北方

領土の歴史的な経緯や元島民の方の思い、そして現在のロシア・ウクライナ情勢等を踏まえたすばらしい発表でしたが、その基となっているのが社会科の授業でした。北方領土問題に対する正しい認識や理解に基づき、自身の思いや考えを発表する姿は、正に、社会的な「見方・考え方」を用いて、社会的事象について調べ、考えたり、選択・判断したりする学びを通して、課題を追究・解決する子供の姿でした。各支部におかれましては、改めて「社会的な見方・考え方」を働かせることができる授業の創意工夫を図るとともに、ふくしまの未来を担う子供たちに、持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育成してほしいと思います。

次年度は、新たな副主題「多面的・多角的に事象を捉え、考察する力を高める授業の工夫」に基づき、研究を推進していくことになります。研究1年次にあたる今年度は、持続可能な社会の実現に向けて必要な資質・能力を育むために、「主体的に学ぶ力」に重点を置いて研究を進めてきましたが、2年次にあたる次年度は、1年次に獲得した「社会的な見方・考え方」を働かせながら「考察する力」を高めることになります。現実社会における生徒を取り巻く多種多様な課題に対して、「それをどのように捉えるのか」「それとどう関わるのか」「それにどのように働きかけるのか」を問うことで、課題解決に向けて様々な側面、角度から自分の意見や考えをまとめる力を育成する研究実践を積み重ねてほしいと思います。そして、4年ぶりに参集する形で開催予定の県中教研研究協議会いわき大会が充実した研究協議会となることを期待しています。

結びに、令和4年度の事業にあたり、ご理解・ご協力をいただいた役員並びに会員の皆様に心より感謝申し上げます。あいさつとさせていただきます。

令和4年度福島県中学校教育研究会社会科研究部組織一覧

部長 鈴木 豊		副部長 阿部裕好 ・ 半沢一寛 ・ 本多康弘 ・ 反畑増生 ・ 新家弘久				
支部	支部長名	勤務校	支部	支部長名	勤務校	
福島	鈴木 豊	信 夫 中	北 会 津	鶴巻 厚保	河 東 学 園	
伊 達	阿部 裕好	伊 達 中	耶 麻	笹川 英俊	喜多方二中	
安 達	大和田康夫	二本松二中	両 沼	本多 康弘	新 鶴 中	
郡 山	半沢 一寛	西 田 学 園	南 会 津	室井 正之	田 島 中	
岩 瀬	濱津 太	天 栄 中	相 馬	反畑 増生	向 陽 中	
石 川	有賀 義人	石 川 中	双 葉	今泉 英哲	広 野 中	
田 村	大竹 英樹	岩 江 中	い わ き	新家 弘久	小名浜一中	
東西しらかわ	川口 和彦	東 中				
事務局 総務 阿部 哲（附属中）		庶務 幕田 秀明（北信中）		会計 三瓶 達也（渡利中）		

研究主題及び研究副主題の解説

1 研究主題及び研究副主題

研究主題

持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力を育む社会科の授業はどうすればよいか

研究副主題

令和4年度 「社会的な見方・考え方を働かせ、主体的に学ぶ力を育てる授業の工夫」
 令和5年度 「多面的・多角的に事象を捉え、考察する力を高める授業の工夫」
 令和6年度 「協働的な学びを通して、新たな価値を創造する力を高める授業の工夫」

2 令和4年度の研究の成果

研究2年次である次年度は、研究1年次の成果と課題を踏まえて、研究を推進する。

(1) 研究1年次の成果

県大会での提案授業や研究協議、各支部での取組を通して確認されたことは以下の通りである。

【課題把握の場面】

- 生徒にとって身近な話題や、切実感のある問いや願いを引き出すことで、自ら追究したい、追究すべきだと考える学習課題を工夫して設定することができた。
- 「単元を貫く学習課題」と「本時の学習課題」との整合性を図ることで、目的や内容が明確化され見通しをもって主体的に取り組むことができた。

【課題追究の場面】

- I C T機器の「思考ツール」を用いることで、思考が可視化されたり、他者の考えや意見との違いを知ることができたりと、効果的な活用事例が多く見られた。
- 教師の適切な支援のもと、多様な学習形態で授業が実践された。コロナ禍でも、I C Tの授業支援ソフトを有効に活用しながら全体で協議することができた。

【まとめ・振り返りの場面】

- ノートやワークシート、振り返りシートなどを活用しながら自分の考えの変容を捉えることができた場を設定することができた。

(2) 今後の課題

今年度の研究実践を通して明らかになった課題は以下の通りである。

【課題把握の場面】

- 興味・関心を導入のみに終わらずに、「考察したい」「追究したい」といった思いが、50分間持続できるような課題設定が必要である。
- 研究主題である「持続可能な社会の実現」を意識した課題設定ができなかった。
- 単元と単元とのつながりを意識した学習課題設定の工夫が必要である。

- 単元構想図を設定し、授業者が学習の見通しをもてるようにする。
- 教える側である教師が、単元を通して生徒に身に付けさせたい力を明確にすることが大切である。

【課題追究の場面】

- 生徒の思考力・判断力・表現力を高めるためにはどうすればよいか、従来の授業のよさに加えてI C T機器の効果的な活用方法を模索していく必要がある。
- 生徒の社会的な見方・考え方を働かせる学習形態の工夫を、今後はより一層吟味していく必要がある。
- 生徒のつぶやきや素朴な疑問などを拾い上げて課題追究につなげていく教師のコーディネート力を高めていく必要がある。

【まとめ・振り返りの場面】

- I C T機器を使用することが目的となってしまう、本時の学習課題に迫りきれない場合があった。
- 思考ツールの活用を重視するあまり、本時の学習課題とまとめの整合性がとれなかった。

3 令和5年度の研究副主題の解説

(1) 研究主題との関連

持続可能な社会の実現に向けて必要な資質・能力を育むため、1年次では「主体的に学ぶ力」に重点をおいて研究を進めてきた。各支部の成果として社会科の学習にこれまで以上に興味・関心をもって取り組む生徒が増えてきたと言える。そこで2年次は、1年次に獲得した社会的な見方・考え方を働かせながら、「考察する力」を高めていきたい。

例えば、地理であれば「防災」、歴史であれば「グローバル化」、そして公民であれば「主権者教育」などといったように、社会的事象に自分たちはどのように関わっていくことが必要で、どのような社会の実現を目指すのかなどを、資料を基に根拠を示しながら考察させる。

そのためには、社会的事象を的確に捉える必要があるが、社会的事象は様々な側面をもっており、どの立場から見ると捉え方が異なってくる。より深く考察するためには、一方向の視点のみだけでなく多面的・多角的な考察が重要になってくる。

また、「考察した力」がどのように高まったのかをはかるために、発表させたり記述させたりといった表現力を高めさせるための工夫も大切である。

なお、「考察する力」については学習指導要領解説社会編P26・P27を参考にしており、選択・判断する力や合意形成する力等も含まれる。

【主題・副主題関連図】

持続可能な社会を実現するために必要な資質・能力

新たな価値を創造する力（研究3年次）

考察する力（研究2年次）

主体的に学ぶ力（研究1年次）

(2) 副主題の解説

① 2年次の研究の方向性

研究2年次では、1年次の成果である社会的な見方・考え方を働かせることが前提である。その上で、社会的事象について多面的・多角的に考察する力を高めることで主題に迫りたい。これにより、思考力・判断力・表現力を確実に育て、3年次につなげていく。

② 「多面的・多角的に事象を捉える」について

多面的・多角的については、中学校学習指導要領解説社会編（P26）で「社会的事象個々の仕組みや働きを把握することにとどまらず、その果たしている役割や事象相互の結び付きなども視野に、様々な側面、角度から捉えることのできる力」と示されている。「多面的・多角的に考察」するとは、学習対象としている社会的事象自体が様々な側面をもつ「多面性」と、社会的事象を様々な角度から捉える「多角性」とを踏まえて考察することを意味しているとある。

そのために、資料を正確に読み取ったり、読み取った事柄を根拠として自己の主張を表現したりする力も重要になる。従来からの資料活用の技能の向上が多面的・多角的に考察する力の基礎となる。

③ 「考察する力」について

多面的・多角的に社会的事象を考察するためには、「考察する力」を高める必要がある。ここでいう「考察する力」とは、中学校学習指導要領解説社会編（P26）では、「現実社会において生徒を取り巻く多種多様な課題に対して、『それをどのように捉えるのか』『それとどのように関わるのか』『それにどのように働きかけるのか』といったことを問う中で、それらの課題の解決に向けて自分の意見や考えをまとめることのできる力」としている。

したがって、単に課題について多面的・多角的に分析するだけでなく、さらにそれらを自分と社会との関わりの中で位置づけ、選択・判断する力や合意形成する力も含み「考察する力」と捉えた。

(3) 「多面的・多角的に事象を捉え、考察する力を高める授業の工夫」のための手だてについて

以下に手だてをあげるが、あくまで一例であり、各支部で工夫しながら取り組んでいただきたい。

【課題把握の場面】

ア 単元を貫く学習課題を効果的に設定する。

単元の指導計画を明確にし、単元構想図を作成するなど、様々な側面や角度から考察できる単元を貫く学習課題の設定を工夫する。

イ 追究意欲が高まるような1単位時間の学習課題を設定する。

「追究してみたい」「どうしてそうなるのだろうか」と生徒が感じ、追究意欲が高まるような学習課題を設定する。また、問題解決型の課題も有効である。

ウ 生活経験や既習事項とのズレや矛盾点を基に学習課題を設定する。

既存の知識の矛盾やズレから多面的・多角的な視点を与え、課題設定につなげる。

エ SDGsの17の目標と関連づけた学習課題を設定する。

今日的な課題との関わりを通して、追究意欲を高めたり、考察の視点を与えたりすることができるようにする。

オ 未来志向型の学習課題を設定する。

将来の社会参画に向けて、「今後どうしていけばよいか」や「どのようにすべきか」といった自ら選択・判断することに関連づけられるような問いを設定する。

カ 生徒が興味・関心をもち、学習意欲が高まるような資料提示を行う。

生徒が多面的・多角的に考察し、追究意欲が高まるような資料を精選し、授業導入で提示する。また、提示の仕方を工夫して興味・関心を高めたい。

キ 学習課題への自分の予想や考えをもたせる。

考察する力を高めるために、自分の予想や考えをもたせる場面を設定する。課題追究や課題解決の場面において、自己の考えや予想と資料とを比較しながら考えを深めさせたい。

このように、学習課題の設定を工夫することで、生徒が様々な立場から考察してみたいと思うことが重要であり、課題追究の意欲へとつながっていくと考える。また、ICT機器を活用して事前にアンケートをとり提示するなど、生徒の固定観念や事実認識を確認した上で学習課題を設定することも有効である。

【課題追究の場面】

ア 発問を吟味する。

生徒が多面的・多角的に考察するために、立場や視点を明確にし、教師が意図的に発問を行うようにする。

イ 学習形態を工夫する。

様々な視点や立場から社会的事象について考察できるように、グループを編成したり、ジグソー法の手法を用いたりすることも有効である。また、討論やディベートを通して異なる立場での議論を行わせることも有効である。

ウ 学習方法を工夫する。

授業におけるゲストティーチャーの活用や校外での調査活動など、学校外の機関と積極的に連携したり、学習の成果を他者に発表したりする。

エ 思考ツールなどを効果的に活用する。

目的に応じた思考ツールで考えを可視化し、様々な面や立場から生徒が考察できるようにする。考察の視点を与え、考えが深まるようにする。

オ ICTを課題追究の場で効果的に活用する。

ICT機器の使用そのものが目的にならないように留意する。自ら調べたり、他者との考えを比較、関連づけたりしながら、自分の考えを再構築できるように工夫する。

カ 資料を工夫し精選する。

適切な量の資料を活用し提示する。生徒が多面的・多角的に考察できるような複数の立場や意見を読み取ることできる資料が有効である。

キ 資料を読み取り、表現する力を高める工夫をする。

多面的・多角的に考察するためには資料を適切に読み取るポイントや基礎的な知識・技能についても十分に指導する。また、立場や視点などを明確にし、表現させる。

ク 意図的なコーディネートを行う。

教師のコーディネートで生徒の思考が深まるように、考える視点を与え、考えを揺さぶる発問や問い返しを行う。

課題追究の場面においては、生徒が多面的・多角的に社会的事象を捉え、考えを深める必要がある。この場面では、教師のコーディネートが重要である。導入の部分での追究意欲が継続し、さらにそれを原動力として他者と協働しながら課題を追究できるように工夫したい。課題解決型の学習のみならず、パフォーマンス課題による学習活動やロールプレイング、ディスカッションなどの多様な形態によって社会的事象について考えを深めさせたい。

【まとめ・振り返りの場面】

ア 学習の過程を振り返ることができるような構造的な板書をする。

板書を見ることで、学習課題に対する自分の予想や考えの変容を振り返る場面を設定したい。

イ 1単位時間でのまとめの場面を確保し、変容を見取る。

授業の終末において十分にまとめの時間を確保し、授業の初めの考えなどとの比較を見取り、生徒の多面的・多角的な思考を促す。

ウ 振り返りシートやポートフォリオなどの継続的な活用で変容を見取る。

何を学んだのかを自分の言葉でまとめたり、話し合いの内容などを記述したりできるように工夫する。その中で、新たに疑問をもたせるなど、追究意欲を高めさせたい。

エ 習熟度に応じた支援をする。

生徒の習熟度によって、次の単元につなげたり、キーワードを与えたりすることで、まとめる内容が充実するように支援する。

オ 学んだことが実社会と結びついていることが実感できるようなまとめ方をする。

「自分はこれから社会とどのように関わるか」や「どのような社会にしていきたいか」など、学んだことを自分ごととして捉え、考察できるようにまとめる工夫したい。その中で、持続可能な社会についても考えさせたい。

まとめ・振り返りの場面においては、これまでの学習で得たことを踏まえ、思考力・判断力・表現力の質を高めたい。そのために、生徒が課題追究の場面で話し合ったり考察したりしたことを選択・判断しながら、根拠をもって自分の考えや意見を主張できるようにする。ICT機器を活用し、生徒がまとめた成果物等の記録を蓄積する方法も学習の振り返りには有効である。

7 2年次の研究計画と研究分野

(1) 研究計画

- ① 主題報告（5月末まで 各支部）
 - 主題の共有 ○ 支部研究計画の立案
- ② 支部研究協議会（7月下旬まで 各支部）
 - 研究実践の経過報告と今後の予定の確認
- ③ 県研究協議会いわき大会（10月）
 - 公開授業（いわき支部の中学校）
 - 代表支部の研究発表と協議
- ④ 県大会報告（10月～11月 各支部）
- ⑤ 研究部報第56号の発行（3月）
 - 本年度研究のまとめと次年度の確認

(2) 研究分野

- 1学年 } 各自が地理的分野と歴史的分野の
- 2学年 } いずれかを選択
- 3学年… 各自が歴史的分野と公民的分野の
いづれかを選択

《参考文献》

「中学校学習指導要領解説社会編」文部科学省 東洋館出版社
 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
 国立教育政策研究所教育課程研究センター
 「見方・考え方 社会科編」澤井陽介 加藤寿朗 東洋館出版社
 「教育科学 社会科教育」明治図書「授業の見方」
 澤井陽介 東洋館 出版社
 「小中社会科授業づくり」澤井陽介、唐木清志 東洋館出版社
 「見方・考え方を働かせる発問スキル50」川端裕介 明治図書
 「単元を貫く『発問』でつくる中学校社会科新授業&評価プラン」
 内藤圭太 明治図書
 「思考ツール×パフォーマンス課題でつくる中学校社会科授業」
 七里広志 明治図書
 「深い学びに導く社会科新発問パターン集」宗實直樹 明治図書

各支部代表の参加分科会配当表

○＝参加 ●＝発表

		福島	伊達	安達	郡山	岩瀬	石川	田村	東西 しら かわ	北 会 津	耶麻 ・ 両沼	南 会 津	相 双	い わ き
R 5	地理	○	○		●	○					●			○
	歴史			●	○				○	●		○		○
	公民	●				●	○	○					○	○

- ① 各分野に5～6支部を配当する。 ※会員数が30人以下の支部は1人、60人以上は3人からの参加とする。
- ② 発表数は2支部とする。
- ③ できるだけ均等にする。数・地区に偏りがないようにする。
- ④ 3年間で1度は発表があたるように配慮する。